

編集者のことば

本号は、1999-2000年度に都市共同研究Ⅲとして行ってきた「都市の安全確保と安心システムの構築に関する研究」の成果の一部を、特集『安全・安心をめざす防災都市づくり研究』として取りまとめたものである。

「阪神・トルコ・台湾の比較防災学的考察と課題－活断層地震に対する防災課題及び対策計画の相対化と普遍化－」（中林一樹・福留邦洋・照本清峰・河上牧子）は、1999年夏に引き続いて発生した海外の二つの断層地震を阪神・淡路大震災と比較しつつ、その特徴を明らかにし、各々の社会的・文化的・経済的・歴史的背景の違いの中で、各々の震災とそれへの取り組みを相対化してとらえようとしたものである。数度にわたる定点調査を基礎にした調査研究である。

「2001年インド西部 Kutch 地震（Mw7.7）の被害調査」（岩楯敏広・荻本孝久）は、2001年1月にインド西部グジャラート州で発生した直下の大地震で、東西200km 南北100km に及ぶ広域災害となった地震である。21世紀の地震災害の幕開けとなった地震災害で、市内の全建物が大破壊した町があるなど、死者も2万人を超えたといわれる。被災地での建物被害及び都市インフラを中心とする被害調査を行ったもので、貴重な調査結果の報告である。

「地震時における地域の消火活動の可能性に関する評価手法の開発」（谷内幸久・川村達彦）は、地震時の同時多発火災に対して、地域の個人及び防災組織等の対応力を総合的に評価し、地域ごとの消火活動能力の評価手法の開発をめざした研究である。とくに地震時の同時多発火災では、地域における初期消火の可否が火災被害の重要な規定要因となっているが、その消火活動の能力評価の手法は未完で、地域での消火訓練や防災訓練につなげる地域の防災力の評価を試みたものである。

GIS データを活用して、実際の市街地における火災延焼シミュレーションが可能となっている。「延焼シミュレーションによる防災まちづくり施策の代替案評価の試み」（加藤孝明）では、地区のまちづくりの現場で、地域の居住者と対話ができる火災シミュレーションを開発したものである。その街で、どのように建物不燃化を進めれば、延焼火災の遅延化や縮小にどのように効果をもたらすかを、図示することを可能とし、防災まちづくりの計画案の策定に有用なシステムの開発を取りまとめたものである。

「レスキュー機器の調査と拡張機的设计」（中村達也）は、阪神・淡路大震災において5500人の人命を奪った建物倒壊による人的被災の実態から、重量物を除去して被災者の救出救助を補助するツールの開発に取り組んだ研究報告である。重量物を持ち上げ、下敷きとなった人を救出するには、不安定な被災現場で容易に操作できる工具が必要であるため、様々なロボットレスキュー機器開発に取り組まれている。この開発は、油圧によるネジ式機器で、隙間を拡張する機器を開発したものである。

「地震災害脆弱性の地域間相対比較の分析」（天国邦博・荻本孝久・他）は、地域の災害脆弱性を明らかにすることにより、地域での防災対策強化への動機付けとその強化すべき方向を明らかにすることを目的として、過去20年間の都道府県の統計データを用いて、地域間の災害脆弱性を相対評価したものである。災害は、地域社会の総合的な現象であり、災害脆弱性も複雑なメカニズムを内在する指標である。この研究では、多変量解析の手法も活用して、その解明に取り組んだものである。

「次の直下地震から東京はどのように復興されるべきか（英文）－阪神大震災と東京の事前復興都市計画の取り組み－」（中林一樹）は、東京都の都市復興マニュアル策定に係わった筆者が、事前復興の基本的な概念を、阪神・淡路大震災における復興街づくりと事前の市民参加のまちづくりの効果を踏まえて、事前に行うべき防災都市づくり計画と連携した復興街づくりの推進の可能性を考察したものである。本

論文は、海外へも東京の震災対策への取り組みとその課題を紹介し、東京からの情報発信をも意図して、英文論文としたものである。

「豪雨災害と情報—平成12年9月東海豪雨災害時の情報収集・伝達・処理—」（吉井博明）は、集中豪雨による都市型水害として、最近では最も大きな災害となった名古屋近郊の新川左岸の決壊による水害時の情報問題を、被災地での聞き取り調査をもとに取りまとめたものである。河川管理者、流域に連続する多くの自治体、どこで破堤や越流が発生するか不明の状況下で、洪水に関する情報のあり方を考察したものである。東京でも都市型水害による被害の発生が増える傾向にあり、短時間で急激な被害となる都市型水害時の情報のあり方は、大きな課題となりつつある。

「都市公園池における景観と植物プランクトン発生の研究」（渡辺泰徳）は、都市公園に設置されている公園池の水の色から、その水質とくに植物プランクトンの発生状況を明らかにしようという都市の自然生態学的研究である。公園利用者にとって公園の池の水質は、その色から判断することが多いが、その色が持つ意味を東京都の多くの都市公園の池から採集した水質分析を通して、解明したものである。

「高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察—生きがい・幸福感との関連を中心に—」（長谷川明弘・藤原佳典・星旦二）は、高齢者にとって元気に生活をつづける重要な原因である「生きがい」に関して、主に既往の研究文献を通して考察したものである。とくに、高齢者の幸福感と生きがいとの関連性に関する研究成果を集大成したものである。

「共同研究と研究協力」（千葉正士）の著者は、都市研究センター創設期の研究者で、この「総合都市研究」の初代編集委員長である。法社会学を専門にされた筆者は、経済学、社会学などの人文社会科学のみならず、地理学や建築学などの理工学分野との共同研究こそが都市研究の重要なスタイルであるとして、当時から都市に関わる共同研究について考究されておられた。その後の考究を取りまとめられた本論文は、投稿論文であり、これからの都市研究のあり方を模索する上で貴重な示唆になっている。

以上の特集論文10編と投稿論文1編で、本号を編集した。

2001年9月

中 林 一 樹